



©Yuki Asada

森の恵みが生み出したランチョンマット

女性が機織り機の前に腰掛け、一本一本、丁寧に糸を紡いでいく。ラオスでは、祖母、母親から娘へ、各家庭で織り物の技術が伝えられるのが古くからのならわしだ。

どの町のマーケットに足を運んでも、あちこちで目にするのは彼女たちが心を込めて織った色鮮やかな布。すべてが手作り。この世に一枚しかない異国情緒あふれる織り物に、世界中の観光客は誰もが魅せられる。

その中でもここ、首都ビエンチャンの北、バンビエン郡の織り物はちょっとユニーク。一般的な織り物と同様、横糸はコットンかシルクだが、縦糸に、現地の木材を素材にして作られた“紙の糸”が使用されているのだ。

森の国とも称されるラオスは、かつては国土の約7割が緑に覆われていたが、焼き畑や違法伐採などが原因で、今ではその面積が5割以下に減少している。そこでJICAは、1996年より森林保全プロジェクトをスタート。現地の人々とともに、森林の保全・復旧に取り組んできた。

木材を安定した収入源に活用できれば、森を大切に守ろうという意識も高まるはず。そんな願いからJICA専門家が紹介したのが「紙布織」の技術。男性が木から作った和紙を糸状にし、女性がそれを機織り機で織り込んでいく。まさに、日本とラオスの伝統工芸の出会いから生まれた製品。染色は草木染めで、“自然に優しい”

織り物としても評判だ。

村人たちの森への思いが織り込まれたラオスの紙布織。食卓に温かい彩りを添えてくれるアイテムだ。



機織り機で和紙からできた糸を織り込んでいく女性

★紙布織ランチョンマットを3人の方にプレゼント！
詳細は38ページへ→

